

平成新山フィールドミュージアム構想の推進に関する観光客アンケート調査

長崎大学大学院 学生会員 ○末吉龍也 長崎大学工学部 フェロー 高橋和雄
長崎大学工学部 正会員 中村聖三 長崎県 正会員 其田智洋

1. まえがき

雲仙普賢岳の火山災害を受けた島原市と深江町では、復興事業がほぼ終了し、火山観光・火山学習体験の場となる拠点施設が整備されている。これらの拠点施設と従来の観光施設との連携を図り、順調な入込み客を宿泊に結びつけることが、地域の活性化に不可欠である。そこで、島原地域において、地域の行政および住民が一体となって、平成新山の景色や災害遺構、火山関係の施設などをまるごと一つのフィールドミュージアムとして構想し、施設間のネットワーク化を図っている。本研究では、この構想の拠点となる各施設および旧来型の観光施設の代表である島原城において観光客アンケートを実施し、観光動態、交通アクセス、構想の周知状況・観光資源としての評価などを分析する。

2. アンケート調査の概要

アンケート調査は、平成15年11月1,2日、構想の拠点施設である雲仙岳災害記念館、道の駅、大野木場砂防みらい館、平成新山ネイチャーセンターおよび従来の観光施設である島原城の5施設で実施された。施設の見学を終えた観光客を対象に、調査員2人一組となって平成新山フィールドミュージアムマップを提示しながら回答を得た。5施設の回答者数は、それぞれ100人、68人、53人、53人および73人である。

3. 観光動態

(1)観光客の特性 どこから来たかを聞いたところ、「長崎県」「福岡県」および「熊本県」が多く、全体の68%を占める。九州外からの観光客は少ない。

(2)観光客の行動 宿泊日数については、「1泊」50%、「日帰り」35%、「2泊」10%の順になっており宿泊客は全体の3分の2以上である（図-1）。

島原市内での滞在時間は「半日程度」44%、「2時間程度」24%で半日以内が68%を占める（図-2）。このように、島原市内での宿泊が少なく通過型の観光行動が目立つ。

島原市内の観光地の他に今回の旅行のコースを聞いたところ、「雲仙温泉街」が44%、次いで「仁田峠」が31%となっており、島原の観光客は「雲仙温泉街」とセットになっていることが分かる。つまり、宿泊地が「雲仙温泉街」で、行きや帰りに島原に立ち寄っていることが分かる。

(3)島原観光で必要なことから 島原観光をするために今後望むことを聞いたところ、「観光案内標識の整備」、「諫早方面からの高速道路の整備」が上位2位を占める。平成新山フィールドミュージアム構想推進会議の検討事項として挙げられている「市内観光循環バスの整備」は要望が少ない。

4. フィールドミュージアム構想に対する観光客の反応

(1)フィールドミュージアム拠点施設における観光行動 フィールドミュージアムの拠点である各施設において島原市内で立ち寄る施設を聞いたところ、雲仙岳災害記念館および道の駅の観光客の約半分は、これらの両方の施設に立ち寄っている。また、大野木場砂防みらい館と平成新山ネイチャーセンターの観光客の半分強は雲仙岳災害記念館および道の駅に立ち寄っている。しかし、雲仙岳災害記念館と大野木場砂防みらい館および平成新山ネイチャーセンターとの繋がりはきわめて小さい。島原城の観光は雲仙岳災害記念館および

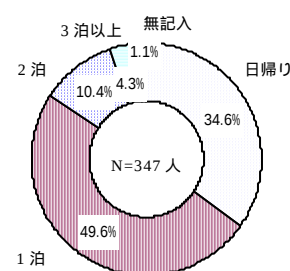


図-1 宿泊日数

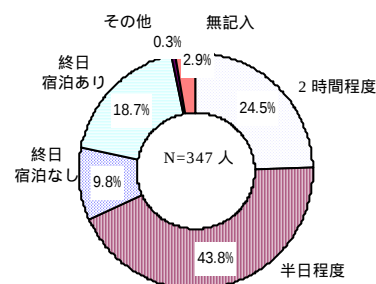


図-2 島原市内での滞在期間

キーワード：火山災害 フィールドミュージアム 観光客アンケート調査

連絡先：〒852-8521 長崎市文教町 1-14 長崎大学 TEL 095-819-2610 FAX 095-819-2627

び道の駅にも40%程度立ち寄っている。このように雲仙岳災害記念館、道の駅および島原城を結ぶコースは定着してきているようである。

(2)拠点施設の周知状況 火山観光の拠点である4つの施設の内容や特色を知っているかに対しては、「あまり知らない」31.7%、「ほとんど知らない」27.6%と知らないとする回答が60%近くを占める（図-3）。

(3)災害復興と火山観光化への評価 観光客によって平成新山フィールドミュージアム構想は「地域の活性化に役立つ」と評価されている。

フィールドミュージアムを知ってもらうために必要なことは「テレビ・ラジオによるコマーシャル」、「新聞・雑誌」による周知に加えて、「施設毎のパンフレットに施設の位置図の相互掲載」、「全体の案内板の設置」および「道路案内板の増設」などと島原に来てからの情報の提供も必要とされている。

(4)マップの評価 平成新山フィールドミュージアム構想推進会議がまとめた平成新山フィールドミュージアムマップ「雲仙火山地球探検」については「分かりやすい」、「持ち運びしやすい」および「大きさが適当」と評価されている。マップ作成の目的が果されている。

5. 大野木場砂防みらい館について

(1)施設を知った理由 大野木場砂防みらい館の場所を知った理由は「島原に来て知った」32%、「テレビ・新聞で知った」28%、「口コミで知った」19%、「観光バスのコースに入っていたから」17%となっている。「大野木場砂防みらい館のパンフレットを見た」および「国土交通省のホームページで知った」はきわめて少ない。

(2)印象に残ったこと 大野木場砂防みらい館で印象に残ったことを聞いたところ、「旧大野木場小学校被災校舎」が89%と大きなインパクトを与えている。

(3)周辺の整備ニーズ 大野木場砂防みらい館の周辺の施設整備について聞いたところ、「食堂・喫茶店などの休憩所」が最も多く(30%)、「地元の物産の販売所」19%が続いており、「砂防堰堤内の散策路」15%や「フラワーランドのような花畑」9%と、砂防指定地内の利活用のニーズは少ない。地元の大野木場地区の住民は休憩所や販売所の設置に消極的であったが、観光客は逆に必要性を認めている（図-4）。

(4)施設の管理費について 旧大野木場小学校被災校舎などの災害遺構を定期的に補修するための維持管理費が必要である。そこで、施設内の駐車場管理などの目的で寄付をお願いすることの可否を聞いたところ、「賛成」74%と大部分の方が寄付の負担には賛成している（図-5）。

6. まとめ

本研究で得られた結果と提案を以下に示す。

- (1)島原市内での宿泊は少なく、通過型の観光客が多い。宿泊につながる火山や自然を学習・体験できる観光モデルコースの設定と体験・学習プログラムの作成が提案できる。
- (2)火山観光の拠点である施設の内容・特色について「知らない」と回答する人が多いことより、各施設の役割分担の明確化・内容充実および情報発信方法を検討することが望まれる。
- (3)大野木場砂防みらい館では、旧大野木場小学校被災校舎が印象に残ると挙げられており、みらい館の中に旧大野木場小学校被災校舎の説明コーナーを設置し、魅力を高めるなどの工夫が提案できる。
- (4)大野木場砂防みらい館の周辺の民地に、食堂・喫茶店などの休憩施設を整備すれば、観光に役立つ。
- (5)施設の維持管理費を寄付金で得ることの賛否については「賛成」が大部分を占める。

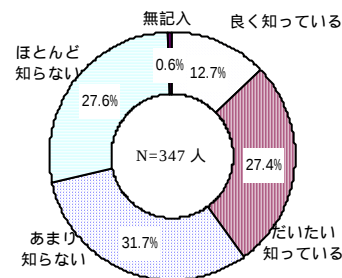


図-3 拠点施設の内容・特色を知っているか

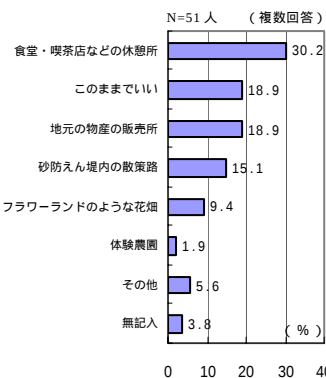


図-4 大野木場砂防みらい館の周辺のニーズ

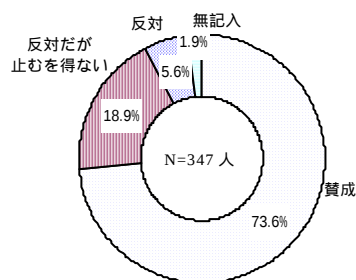


図-5 施設の管理費を寄付金として得ることの賛否